

武蔵野日曜集会

永遠の生命

——ヨハネ伝第3章14～36節——

1984年3月4日（武蔵野）

小池辰雄

神の愛「イン」の世界 世の救われん為 信仰は既に私たちの中にいただいているもの 汝
何処にありや 新郎と新婦 生命の質は愛 我らは死して甦る

【ヨハネ3・14～36】

14 モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。15 すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』

16 それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。17 神その子を世に遣わしたまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18 彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりし故なり。19 その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為^{おこない}の悪しきによりて、光よりも暗黒^{くらみ}を愛したり。20 すべて悪を行う者は光をにくみて光に來らず、その行為の責められざらん為なり。21 真^{まこと}をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顯れん為なり。

22 この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其処^{そこ}にともに留りてバプテスマを施し給う。23 ヨハネもサリムに近きアイノンにてバプテスマを施したり、其処に水おおくある故なり。人々つどい來りてバプテスマを受く。24 ヨハネは未だ獄^{いづく}に入れられざりしなり。25 ここにヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔^{きよ}につきて論起^{ろんぎ}こりたれば、26 彼らヨハネの許に來りて言う『ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方^{かなた}にありし者、なんじが証せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり』27 ヨハネ答えて言う『人は天より与えられずば、何をも受くること能わす。28 「我はキリストにあらず」唯^{ただ}「その前に遣されたる者なり」と我が言いしことに就きて証する者は、汝らなり。29 新婦^{はなよめ}をもつ者は新郎^{はなむこ}なり、新郎の友は、立ちて新郎の声をきくとき、大いに喜ぶ、この我が歡喜^{よろこび}いま満ちたり。30 彼は必ず盛んになり、我は衰^{おとろ}うべし』

31 上より來^{きた}るものは凡ての物の上にあり、地より出^いづるものは地の者にし



て、その語ることも地のことなり。天より来るものは凡ての物の上にあり。³² 彼その見しところ、聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず。³³ その証を受ける者は、印して神を真なりとす。³⁴ 神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。³⁵ 父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。³⁶ 御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反って神の怒その上に止るなり。

●神の愛

¹⁶ それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。

これは新約聖書で最も大事な句の一つです。今日は、もうこの一句だけでもいいくらいです。私は内村先生の大手町の集会に行ったときに、内村先生はこのところを非常に力強くお話しになった。そういう印象ばかりは覚えていなければならない、内容は覚えていません。今から60年近く前のことです。妙なものだね、印象というものはいつまでも残るんだね、概念的なことはどこかへ行ってしまうて。象徴とか、印象とか、人間の心の中にはそういうものが一番残るのかな。

¹⁶ それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、

と。正にその通りに書いてある。この場合、ヨハネ伝で「世」というのは「罪の世」のこと。この罪の世を愛したもうたと。罪の世を愛する愛し方は、

「独子を賜う」

という。これは十字架の贖罪死のことが、また永遠の生命がその後に出てきます。ヨハネ伝の大事なひとつの概念は——概念と言ってもただ概念を言っているのではないけれども——内容は「永遠の生命」です。

すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。

「彼を信する者」というのは

「彼の中へと信じ入る者」

という言い方です。非常に強い言い方です。

「決して亡びないように」

と。「亡びる」というのは、「第二の死」のような徹底的な亡びのことを言っている、これは強い字です。それが存在的に亡びてしまわないで、永遠の生命を得るためにと。

神の愛は、自分に背く者、裏切る者、忘れる者——ダンテの地獄に出てくるようないろいろな現象がありますが——そういう世を愛したというんです。愛するに価しないものを、あるいは道徳的に言う、愛すべくもあらざるところの、そういったものを愛したという。だから、この「愛する」ということと「救う」ということは同じ意味内容です。神さまが



愛するということは、救うということです。

私たちも、人を愛するということは人を救いの世界に入れるということ。人間が人間を救うのではない。救いの世界に入れてあげるということ。預言者たちが望んでいたところの実体はキリストですから。そういうような凄いのは天上天下、東西古今、ただキリストのみです。お釈迦さんがこれに類似しますけれども、やはり、キリストの方が何といっても凄い。

●「イン」の世界

これは、ヨハネが、全ヨハネ福音書のひとつの中心として語っているような言葉です。忽然として素晴らしい言葉が出てくる。ところが、そのすぐ前の14節に、

¹⁴ モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。

「必ず挙げらるべし」というのは、

「必ず十字架にかけられる」

ということ。

¹⁵ すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』

とある。14、15節がその前段になってきているわけです。ここにも「永遠の生命」という言葉がある。この15節の

「永遠の生命を得ん為に」

と16節のとは全く同じ表現です。両方とも節の終りの方にこの三字の、

「エケー・ゾーエーン・アイオーニオン」

という言葉が出てくる。15節の方は、

「彼の中に信じている者」（ピステオー・エン・アウトー）

となっており、16節の方は、

「彼の中へと信ずる者」（ピステオー・エイス・アウトン）

となっている。15節のは三格的な言い方で、

「中に今あつて、中に信ずる」

という言い方です。「信ずる」という言葉はよく三格支配（エン）で言うので、「…に信ずる」なんて塚本先生もいつか言っていましたけれども。日本語としては、「誰々に信ずる」という表現もちょっとおかしい。「誰々に信頼する」ならわかるけれども。信じている状態です。中に入っている状態。「の中へ」入っていくのが、「エイス」です。英語の「イン」と「イントゥー」と同じようなわけです。どっちにしろ、「信ずる」という言葉が「イン」という言葉と連関して使っているということがおもしろい。だから、

「イン・クライスト」「エン・クリスト」

という、どうしてもこの「イン」の世界です。「イン」にしろ「イントゥー」しろ、とにかく



く「イン」の世界です。信仰というのは、外で離れているのではなくて中へ入ってしまう。
16 **それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、**
というのは、

「神は独子を賜いて世を救うほどに世を愛し給えり」
なんだ。

すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。

「彼を信受する者は絶対に亡びない。地上にいて既に永遠の生命を得るのである」

と。ギリシア語の言い方は、「得んために」だけれども、上から来れば結果になる。だから、「必ず得るのである」と。こういう16節を読んで、

「神はその独子を与えてくださって、世の一人である私を救ってくださいました。彼を信受したので、私はもう永遠に亡びない。永遠の生命の中にあります」

と。そういうように16節をハッキリと自分のものとして読まなくては。「ああ、そうですか」ではない。

こういうのを読んでいて、私は机に向かっていても、すぐに瞑想の世界に入る。そうすると、グーッと展開してくる。私はあまりたくさん本は読めないんだ。読んでいては、すぐ瞑想の世界の中へ入るものだから。瞑想というのは、考えるということではない。根源的な現実の中へ入っていく。そうしたらば、聖書は、読み入ることと祈り入ることが一つになる。そういうような読み方でなければ、本当に聖書を読んでいるのではない。意味がどうのこのうということではない。圧倒されて、その世界からの凄い力がくる。永遠の生命の物質が来してしまう。だから違うんです、この聖書というのは。これは絶対に御霊の文字ですから。人間がでつちあげたような文字とは違うんだ。

●世の救われん為

17 **神その子を世に遣わしたまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。**

キリストは、

「私の審判は私の審判ではない。神さまの審判だ」

ということを別なところで言っておられますが、もちろん、審判はありますけれども、しかし、究極においては救われんためだという。どこまでも救いが目的なんです。

「審判は恩恵の別な表れである」

という。イザヤ書を読んでもわかりますけれども。いわゆる人を審く旧約的な意味におけるところの審判ではない。

「世を救わんが為である」

という。万人は救いを要するんですから。



「私は、救いは必要がない」

という人は一人もない。だから、万人は宗教人なんです。誰でもが救いを要する。そのくせに、「宗教は……」と言ってそつちのけにして、ただ死ぬという坊さんに「南無妙法蓮華經」や「南無阿彌陀仏」をやってもらう。そんなのはひとつも信仰でもなんでもない。けれどもやっぱり、そうやって執り成さなければどうにもならないようにできているんだ、人間というのは。それなら、日常生活の中で一番力強い救いの世界に入って、

「世のため人のため」

というのはそこから出てくるわけですものね。「世のため人のため」と言いつても、相手を天的な喜びに入れるような「世のため人のため」でなかったらば、ある意味においては、災いになることもある。単なる御利益的な角度になって、この世的な幸福で

「めでたし、めでたし」

なんてやっている、それは本当はめでたくはない。そういう意味では我々が本当に「世のため人のため」というのは、やはり究極の目的はこの永遠の生命に相手を入れることです。そのためにはやはり、この福音の真理がハッキリと告白されなければならない。

●信仰は既に私たちの中にいただいているもの

¹⁸彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。

はい、その通りですね。このキリストの他に本当の意味において救いがないわけです。その救いの彼を受けとる者は、信受する者はもう審かれない。我々に対する審判はキリストが全部引き受けてしまったんだから、審かれない。それが十字架ですから。十字架を受けとらなかつたならば、もうそれで自分自身が審判へと自分を持って行っているわけです、「審かれたり」と。

神の独子の名を信ぜざりし故なり。

救いは光であり、審判は闇である。闇の中に入れられてしまう。

¹⁹その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、

光よりも暗黒を愛したり。

この世はどんなに輝いているように見えても実は、質は暗黒なんだ。艱難の世界、涙の世、界がどんなに暗いように見えても、実は福音を受けている人は光なんです。

私の母は30何年と失明して闇の世界にいましたけれども、魂は本当に光の中にいたね。小池光子という名前と同じように。今、思い出しても私は母の実存には頭が上がりません、素晴らしくて。失明をかかったことがないものね。そして、人のことばかり心配していた。本当の光とは何か、本当の闇とは何かというと、やはり、キリストを受けとらなければ、本当の光の中にはいないし、受けとれば、それが光の子である。

「汝らは世の光なり」



というのは、

「私がお前の中で光っているぞ」

ということ。我々にとつてこの信仰ということがいかに現実であるか。何か未だ受けとらないものを信ずるのを信仰のように思うけれども、そうじゃない。信仰は既に私たちの中にいたでいるものだ。

「御国をきたらせたまえ」

と祈るのは、御国が来ているから祈れるので、そうでなければ祈れない。もうとにかく、ぶつつぶれ、ぶつ倒れて、あるがままの自分を投げ出してごらん下さい。そうしたら、それはもう光に貫かれますから。キリストの生命がやって来ますから。心理的に信ずるとか何とか、そんなことは思わなくていい。

私は、祈りとも瞑想とも区別ができないような境地でもって何時間でもいられますよ、いようと思えば。とにかく、何か不思議でしょうがない。ところが、この聖書を読んでいると、それと同じような状態で——何と言ったって、相手が御言ですからね——なっぺい。聖書くらい楽しい本はない。これはハッキリそうです。何か教えたかと思ったら、この聖書は楽しくないですよ、「キリスト教だ」なんて言ったら。これは救いの、生命の、光の、愛の、そういうドラマの世界だから。そうやって読んでください。キリストの言葉は、ヘタすると躓くから。躓くようなキリストの言葉にも躓かない読み方がある。パウロさんなんか少しやっこしいくらいだ。ヨハネが一番簡単だ。

●汝何処にありや

「光よりも暗きを愛した」

という。

「行いの悪しきによりて」

というのは、悪しき行いが起きてくるということ、それは元がないから起きてくる。元があれば、悪しき行いは起きてこない。言葉や業の現象を見て、どうのこうのではない。その奥の世界がどうだという問題なんです。「ドゥー」（行為）ではなく、「ビー」（存在）の世界です。「ビー」の世界をいつも問題にしている。「タート」（行為）ではなく、「ザイン」（存在）の世界だということです。

「お前はどこにいるか？」

とアダムは聞かれましたね。あの神さまの問いは素晴らしい深い問いです。

「汝何処にありや」

と。これは審判と愛憐と両方があると、私はあの歌（召団讃歌A21「地は形なく」。「青葉茂れる桜井の」の曲）に書いたでしよ。

「汝何処にありや」



と聞かれたら、

「私は主さまの中にいます」

と、そう答えられれば、これは実存的な本当の答えになる。

「私はあなたの中にいますよ。あなたの中にいるじゃありませんか」

と答えられれば大変結構です。ところが、葉陰に、木の陰に隠れてしまった。それではダメだ。それは闇の世界だ。そこから悪しき行いが出てくる。問題は「汝何処にありや」だ。今度は、自分自身に聞けばいい。

「我何処にありや」

と。ただ神殿の中にいたってダメだよ、キリストという生ける神殿の中にいなかったら。

20 すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。21 真をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顯れん為なり。

これは「神によりて」ではない。「神にありて」です。「真」というのは、ヘブライ語の「エメツ」「アーメン」という字からくる。

「アーメンたるものを行う者は光にきたる」ということです。

● 新郎と新婦

22 この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其処にともに留りてバプテスマを施し給う。

これはキリストがバプテスマしたのではない。弟子たちが水のバプテスマをした。間違わないようにしてください。

23 ヨハネもサリムに近きアイノンにてバプテスマを施したり、

「サリム」というのは、「シャーローム」と同じで「救い」という字です。「アイノン」というのは「アイン」「泉」という字からきている言葉です。そこにはだいぶ泉が湧いていたらしい。それで「アイノン」という言葉が出てくる。

其処に水おおくある故なり。人々つどい来りてバプテスマを受く。24 ヨハネは未だ獄に入れられざりしなり。

「ヨハネ」とは洗礼のヨハネです。ヨハネ伝で「ヨハネ」というのはみなこの洗礼のヨハネです。

25 ここにヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔につきて論起りたれば、

「潔め」というのは水のバプテスマです。

26 彼らヨハネの許に來りて言う『ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方に



ありし者、なんじが証せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり』

キリストの方についてしまったものだから、キリストの弟子になった者と、ヨハネの弟子との間に何か争いが起きてしまった。それでみんなあっちへ行ってしまうから、けしからんと。

27 ヨハネ答えて言う『人は天より与えられずば、何をも受くること能わず。28「我はキリストにあらず」唯「その前に遣^{のこ}されたる者なり」

キリストは天から与えられた人だと。私はその「天から与えられた人」とは——あるいは、「遣わされた人」、あとに「遣わされる」という言葉がでている——私とイエスという人とはちよつと次元が違うんだ。だから、そんな争いはよした方がいいぞと。

と我が言いしことに就きて証する者は、汝らなり。

お前たちはそのことをわかつているはずではないかと。

29 新婦^{はなよめ}をもつ者は新郎^{はなむこ}なり、

即ち、キリストを信ずる者を「新婦」と言うわけですから、これは本当のイスラエルだね、ただ血筋のイスラエルではなくて。

新郎の友は、立ちて新郎の声をきくとき、大いに喜ぶ、

「新郎の友」というのは洗礼のヨハネのこと。「新郎」とは即ちキリスト・イエスのこと。「ああ、この人が来た」と言つて、自分はうれしい。私は先駆者で、この人をみんなに紹介したわけで、争うのではないんだと。

この我が^{よるこび}歡喜いま満ちたり。

本当にこのキリストがそのような救いを施す、永遠の生命を与える方であるから、うれしいんだと。

30 彼は必ず盛んになり、我は衰うべし』

キリストはやがてみんなに本当に崇められ讃美される。私はもうそれで自分の務めは終わるから、衰えざるを得ないんだと。

● 生命の質は愛

31 上より来るものは凡ての物の上にあり、

天界から遣わされている者はすべての、この現象界の上にある。地上の人間界の上にある。地より出づるものは地の者にして、

自然的生命によるところの、地から出ているものは、即ち、

「人新たに生まれずば、人天から生まれなければ」

とキリストが言われたのと違って、天から生まれられないようなものは「地の者にして、

その語ることも地のことなり。

相対的真理しか言えないんだ。絶対的なことが言えない。だから、どんな素晴らしい哲学



者も、結局それは願われている世界であって、本当に真理をハッキリと言える世界ではない。ただ探究の世界だ。プラトンやカントは偉大な哲学者だけれども、人ひとりを救うことができない。救うことのできるのは、天から来たところのキリストだけ。また、如来の中に入ったお釈迦さんです。

天より来るものは凡ての物の上にあり。³² 彼その見しところ、聞きしところを証したもうに、

神さまにおいて見たこと、聞いたことを全部、キリストは告白しておられる、証しておられる、やっておられる。

誰もその証を受けず。

ところが、受けない。

³³ その証を受くる者は、印して神を真なりとす。

これは本当に受けたらばそうだ。しかし、本当に受けなかったですよ、キリストが十字架にかかるまでは。直弟子たちも聖霊が来るまでは受けられない。まだ影を見ているくらいなものだ。ベールがとれていない。聖霊が来ないと、ベールがとれないから。この「印して」というのは、御霊の印を受けることです。

³⁴ 神の遣し給いし者は神の言をかたる、

「遣し給いし者」というのは正に「使徒」「アポストロス」という字です。「神の言」というのは、私がよく「根源語」と言うでしょ。ギリシア語でもヘブライ語でもないぞと。そういう根源語です。この場合はアラミ語でしょうけれども、アラミ語は神の言の一つの現象であるのにすぎないので、神の言そのものは霊言、異言的なものです。仏教でいうなら、「陀羅尼」のようなものです。

神、御霊を賜いて量りなければなり。

ハッキリ言っている。聖霊がやってきて、その内容は無限無量である。神の言はその無限無量な内容を持っている。

「神の遣し給いし者は神の言をかたる」

という。キリストの中に、エン・クリストになった者はこの福音の真理を告白する。

「神、御霊を賜いて極まりなければなり」

と。尽くるところを知らずというわけだ。

³⁵ 父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。

霊界に、天界に入ってしまったこのキリストは今、万物をその御手の中にゆだねられている。エペソ、ピリピ、コロサイあたりに出ている事態です。そのキリストが我々に示したもう具体的な事態は御霊によるわけです。

³⁶ 御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止るなり。



「御子を信する者、御子を受けとる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず」

と。ここに「信ずる」という言葉と「従う」という言葉が使い分けしてあるけれども、中身は同じことです。別な言葉で言っただけのはなし。御子を受けとると、それは実存的に必ず行動に出る。それが「従う」です。信じなければ、本当に従うという行動は出てこない。そういう意味における「信」というのが、何と言っても中心ですから。

「我に従え」

と言うときにも、

「まあ仕方がない。無理やりに従おう」

なんていうのは、それは「従う」にならない。必ずどこかで背いてしまう。本当に従うというのは信徒だからね。信じ従うんだから、全面的に受けとらなければ、従うことはできない。

「永遠の生命」は、仏教的な言葉でいえば、「無量寿」だよ。ところが、この「永遠」という字に躓かないようにしてください。ただ時間的に永いのではない。質的なことです。質的に亡びない生命。しかも、その質的に亡びない生命の質は何かというと、これは愛です。生命の質は愛。愛のない生命は生命でないというわけです。愛は分かたれるもの。即ち、愛は生命を分かつもの、救いにあずからせるもの。クリスチャンで愛がなかったら、これはもうクリスチャンでないですね、喜びと愛がなかったら。くすぶっていたのでは。

●我らは死して甦る

ヨハネ第一書を見ますかね。4章7節、

「愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、

「愛は神より出づ」

と。これはゲーテが好きな言葉です。ゲーテにとっては、愛は一切、神から来ている。恋愛であろうと何であろうと。だから、彼は非常に明るい人なんです。

藤井先生は「恋愛否定論」なんて書いた。あれはけしからんよ。ちよつと無教会は固くて困るよな、そういう大きなとり方をしないから。親子の愛であろうと、友人の愛であろうと、師弟の愛であろうと、全部、愛は神から来ている。そういう一元の世界に入らなければダメです。

「愛にはいろんな種類がある」

なんてやっている。

「アガペーだ、フィロースだ、エロースだ」

なんていろいろやっている。いろんな言葉がある。そして、どうだこうだと分析している。そんな分析はいらない。全部、上から来ている。神さまが全部、創造したんだもの。感性



的なものであったって、みんなこれは神さまの創造した働きだからね。それを神さまとの関係を切ってしまつて、自分のものにするからみんなおかしいことになる。

「愛は神より出づる」

と、絶対無条件に言っているんだ。

「こういう愛は神から出ている」

とは書いてない。

「愛は神から出ている」

と無条件にこのヨハネは言っている。愛というものは神さまから来ている。その他は愛ではないぞと。もつと真理を、線を太く大胆に受けとっていかなければダメですよ。何か非常に細いね。

おおよそ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。⁸愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。

これは三段論法ではないですよ、一段論法です、全部。一段論法、断言命法。

⁹神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子^{ひとりご}を世に遣^{つかわ}し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。

では、愛は具体的にはどういうところに来ているかというところ、このキリストにおけるところの神の愛が中心だという。こここのところに一番ハッキリでている。ヨハネ伝と同じですよ、このヨハネ第一書4章9節は。

¹⁰愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために有^{なだ}めの供物^{そなえもの}となし給いし是なり。

と非常にハッキリと出ている。贖罪愛です。

¹¹愛する者よ、斯^{かく}のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがい^{がい}に相愛すべし。

そういう同質の愛で愛せよと。

¹²未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在^まし、その愛も亦われらに全うせらる。¹³神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。」（ヨハネ一4・7～13）

13節は大事です。

「我ら神にあり、神われらにある」

という、

「エン・テオー」（神の中に）

なんです。神の中にある。

「エン・クリスト」（キリストの中に）

ばかりでなくて、「エン・テオー」です。



十字架、聖霊、永遠の生命——絶対に亡びない生命、それが永遠の生命です——もう我々は永遠の生命の中に入ってしまったっているんだから。いつ死んだっていいよ。

「先生は大きな詩を書くなんて言つて、大法螺をふいている」

なんて。私は大法螺をふいている。いつ仆れたつてかまわない。大法螺をふいているけれども、絶対にやらないでは居られないという烈々たるものがあります。私は、目の黒いうちは人には認められなくていい。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁朗なんていう、こういう人物に私が遭つてきたのは、私に特別な使命があるからです。

「¹⁶主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、

我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一3・16）

これがヨハネ第一書の3章16節なんだよ。これが3・16なんだ。きつきのヨハネ伝と同じ。

¹⁶それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡

びずして永遠の生命を得んためなり。

ヨハネ伝3章16節とヨハネ第一書の3章16節。そのような

「生命を捨てる」

というのは、

「生命を本当に与える」

こと。その人は永遠の生命を持っているから。生命を捨てた者はまた生命に甦^{よみがえ}るんですよ。それがキリストの復活です。我らは死して甦^{よみがえ}る。

もうキリストが一点張りの、キリスト中心になるといふと——固いキリストではないですよ、無限無量なキリストですから——一切を担い、一切を包んでしまうような、そういった現実の中に入る。我々自身が本当にそういう在り方をしていかなかったら、証し人でなくなる。どうぞ、そういう意味において、大いにやってください。

